近畿地区会議学術講演会

― 未来の語り口：学術からの貢献 ―

人口ボーナスを享受した右肩上がりの時代が終わり、日本社会は、人口減少と高齢化の進行の先頭に立とうとしていると言われています。海外の「先進」国のモデルを模倣する時代は終わり、自ら考え、試行錯誤を通じて未来を切り開く覚悟が、私たちには求められています。

今回の学術講演会では、さまざまな立場から＜未来の語り口＞を提示し、今後の日本社会の方向性をめぐって、討議のための素材を提供したいと思います。

講演 1 フューチャー・デザイン：持続可能な社会を引き継ぐために

原　圭史郎

気候変動や資源エネルギー問題、インフラの維持管理などの諸課題は、世代を超える中長期的な問題です。これらは、既存のアプローチや社会システムの下では適切に対処していくことが困難です。例えば、ヒトには近視性や将来に関する楽観性といった特性があり、また、「市場」「民主制」などの現代の社会システムは将来世代の利益を反映する仕組みではありません。ヒトの特性やこれらの社会システムの下では、世代を超えた複雑な問題に対処することは困難だと考えられます。

これらの課題に対処し、持続可能な自然と社会を将来世代に引き継いでいくための様々な社会の仕組みをデザインする試みが「フューチャー・デザイン」です。将来世代の利益も見据えて、持続可能な意思決定を目指す新たな枠組みとして、様々な学術分野を融合した学際的かつ実践的な研究が進みつつあります。自治体などではフューチャー・デザインの枠組みを活用したビジョンづくりや政策立案の実践が昨今進みつつあります。本講演ではフューチャー・デザインをご紹介するとともに、研究や社会実装の最前線についてお話しします。

講演 2 AI を活用した社会構想と政策提言

広井　良典

「2050 年、日本は持続可能か？」――これは私たちの研究グループが、AI（人工知能）を活用した日本社会の未来に関するシミュレーションを行うにあたり、出発点において立てた問いです。将来世代への多額の借金の先送り、格差の拡大、国際的に見て高い社会的孤立など、現在の日本社会は多くの課題に直面しています。

このような問題意識から、2016 年に京都大学に設置された「日立京大ラボ」での共同研究として、私たちは AI を活用した持続可能な日本の未来のための政策提言を2017年９月にまとめ公表を行いました。具体的には、日本社会の今後にとって重要と考えられる 149 個の社会的要因を抽出し、その因果連関モデルを作成した上で、AI を用いて約 2 万通りの未来シナリオ予測を行い、それらを①人口、②財政・社会保障、③都市・地域、④環境・資源という 4 つの持続可能性と、雇用、格差、健康、幸福という 4 つの領域に注目して評価するとともに、望ましいシナリオに向かうための政策を吟味しました。こうした研究の概要とその後の展開についてお話しできればと思います。

講演 3 食とリスクの視点からみた未来

新山　陽子

食物は、独立栄養生物でない人間にとって、命と健康を繋ぐために不可欠なものです。食物の安全性については、リスクをゼロにはできませんが、リスクを管理するリスクアナリシスと呼ばれる国際的な枠組みが構築され、各国政府によって取り組まれるようになったことにより、国際的な知見を蓄積して措置にあたれるようになりました。一方、食物の生産と供給の安定性については、解決策がみえない課題が山積しています。何より市場の状態です。取引される農産物価格がその生産費より低いことが少なくありません。食物の源を生み出す農業とフードシステムの未来に向けた存続が危ぶまれます。小売業の市場支配力が原因と考えられ、経済学的な計測結果もだされるようになりましたが、市場において農業や食品産業との交渉力をバランスさせる方策がみいだせていません。欧州連合でも対策に苦慮されています。安ければ良いか、消費者市民の購買行動も問われます。

講演 4 Society 5.0 が描く未来

東野　輝夫

本講演では、政府が提唱している「Society 5.0（超スマート社会）」のねらいと私どもが実施している Society 5.0 関連の研究成果を紹介します。Society 5.0 は、内閣府の第 5 期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として提唱されたものであり、IoT（Internet of Things）やロボット、人工知能（AI）、ビッグデータ等の技術を様々な産業や社会生活に取り入れ、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムを構築することにより、一人一人のニーズに合わせる形で社会的課題を解決しようとするものです。講演では、大阪大学が申請して採択された文部科学省平成 30 年度 Society 5.0 実現化研究拠点支援事業「ライフデザイン・イノベーション研究拠点」の概要や、IoT やビッグデータ等を活用した災害支援技術、群衆の行動把握技術などを紹介します。

講演 5 変容する情報社会と未来の構想：ポスト・ヒューマンの時代とは

遠藤　薫

20 世紀後半に離陸した情報（コンピュータ）社会は、20 世紀末から 21 世紀初頭にかけてインターネット社会へと展開し、さらにいま、AI・IoT を埋め込んだ Society5.0 へと進化しようとしています。AI は擬人間（人間もどき）であると同時に、人間をしのぐ「超人間」です。このパラドキシカルな関係は、人体にデジタル機器を埋め込む技術や、仮想現実、拡張現実などによる人間自身の（ネットワーク化された）サイボーグ化によって一層複雑化しています。これまでの人間観を根底から問い直す「ポスト・ヒューマン」の時代がいまそこに来ています。「ポスト・ヒューマン」は、サイバー空間と共進化するだけではありません。再生医療、クローン技術、ヒトと動物のキメラ作成などは、まさにわれわれがそこからやってきた自然界とも新たな関係構築を迫っています。近年の「動物の権利」論も視野に入れつつ、脱人間中心的ポスト・ヒューマンの時代について、民俗学的なモノ（物）＝モノ（者）＝モノ（霊）の世界観もふまえて、未来のあり方を構想します。